

平城京左京三条一坊十五坪の調査

—第534次

1 はじめに

2014年6月3日から7月24日にかけて、店舗新築にともなう事前調査として、平城京左京三条一坊十五坪の発掘調査をおこなった。建物建設予定部分に、東西16m、南北25mの調査区を設定した。調査面積は400㎡である。

本調査区は、長屋王邸跡の西方にあたる。また過去には今回の調査区の北方を調査しており（第118-8次・第230次・第266次・第349次）、その成果から十五坪とその北の十六坪は一体となっており、四面に廂を持つ大型の掘立柱建物や京内最大規模の井戸が検出されているほか、建物群が密に並ぶ敷地であったことがあきらかにされている（『1979 平城概報』、『1992 平城概報』、『1995 平城概報』、『紀要 2003』）。また、本調査区の東方は奈文研（第379次、『紀要 2005』）のほか、奈良市教育委員会による発掘調査がおこなわれており（市教委94次）¹⁾、後者では奈良時代の掘立柱建物が確認されている。

2 基本層序

調査区西部では地表から表土（80cm、旧駐車場盛土、旧耕土を含む）、黒褐色シルト質土（10～15cm）、暗灰黄色シルト質土（10～15cm）、灰色砂混シルト質土（40cm前後）のち、黒色粗砂からなる地山に至る。遺構検出面は黒褐色シルト質土上面であるが、一部の遺構はその下層の暗灰黄色シルト質土上面で検出している。遺構検出面の高さは、調査区を南北に横断する攪乱溝を基準に西部と東部に分けた場合、調査区西部では標高60.90m前後であるのに対し、調査区東部では標高60.70m前後と相対的に低い。これは、調査区東部においては畜力による耕作痕とみられる偶蹄目動物の足跡列が広い範囲で顕著にみられたことからわかるように、耕作による遺構面の削平が調査区の東部でより深くに及んでいたことによる。

3 検出した遺構

今回の調査で検出した主な遺構は、南北に廂をもつ東西棟掘立柱建物1棟、東西掘立柱塀2条、東西掘立柱塀1条、南北掘立柱塀1条である（図286）。

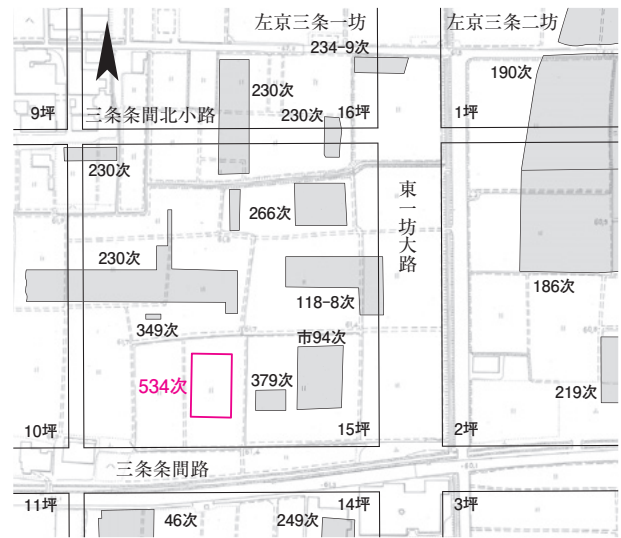


図281 第534次調査区位置図 1：3000

掘立柱建物SB10500 調査区の中央で検出した東西棟掘立柱建物。検出したのは21基の柱穴で、桁行4間以上、梁行4間分である（図283）。柱穴は東西1.2～2.0m、南北1.2～1.8mと大型である。柱間寸法は、桁行・梁行ともに約3.0mである。柱穴が残存する深さは38～76cm。東側柱筋から1間東にあたる調査区東壁では柱穴が検出されなかったことから、この建物の東側には廂が見つからないことがわかる。また、この建物はさらに西に続くと考えられるが、その規模については今後の調査に委ねるほかない。なお、SB10500は掘立柱塀SA10495と2ヵ所で重複関係があり、SA10495が古く、SB10500が新しいことを確認した（図285）。

掘立柱塀SA10495 調査区の中央よりやや北側で検出した東西掘立柱塀で、6基の柱穴を検出した。柱穴は東西1.2～1.4m、南北0.9～1.0m、桁行柱間寸法は約2.4mである。柱穴が残存する深さは78～108cm。東端の柱穴から1間東にあたる調査区東壁付近で柱穴が検出されなかったことから、これより東側には続かないものとみられる。

掘立柱塀SA10496 調査区の北端で検出した東西掘立柱塀で、5基の柱穴を検出した。柱穴は東西1.2～1.6m、南北1.2m以上、桁行柱間寸法は約2.8mである。柱穴が残存する深さは95cmで、柱抜取穴からは磚が出土した。SB10500同様にさらに西に続くと考えられる。SA10496は柱穴の規模が本調査区の建物に類似し、北側が未調査であることから掘立柱建物となる可能性もある。

掘立柱塀SA10498 調査区の南部で2基の柱穴を確認した。攪乱溝によって大半は破壊されており、柱穴の東端部のみを検出した。柱穴は東西0.6m以上、南北1.2～1.6



図282 調査区全景（北東から）



図283 SB10500（西から）



図284 SA10946柱穴断面（南から）

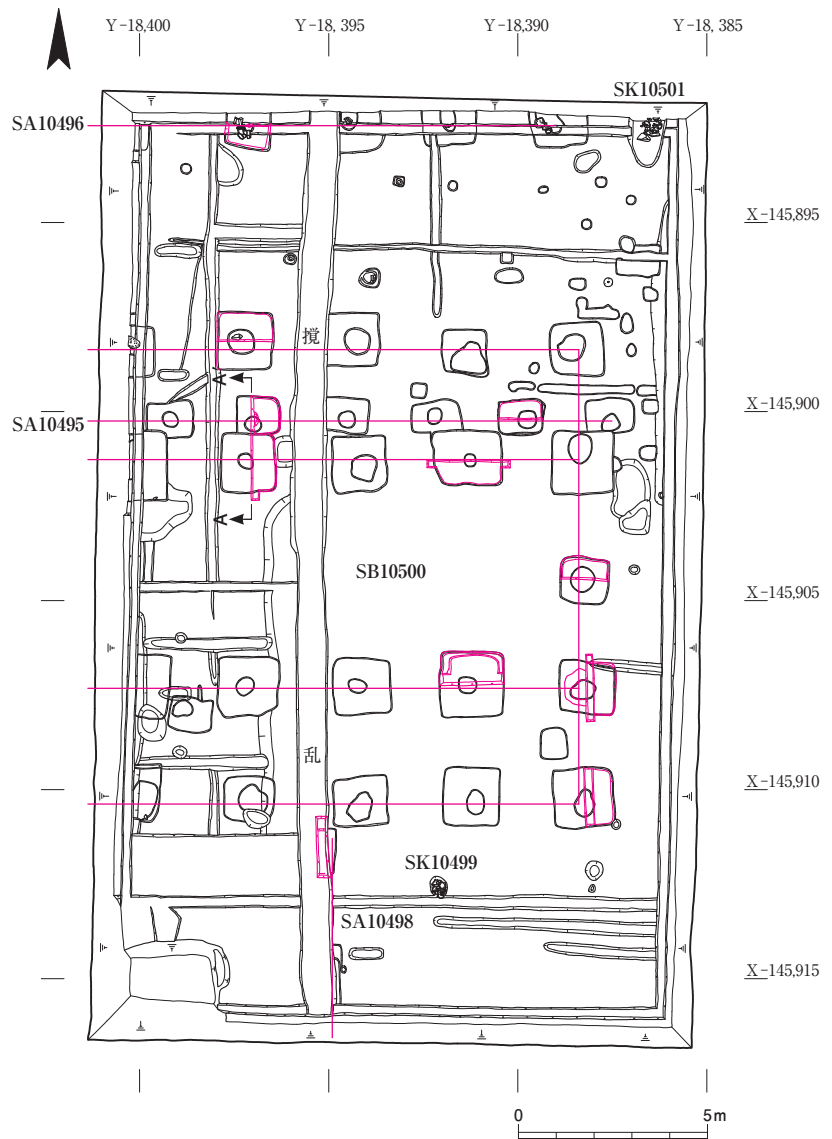


図286 第534次調査区遺構図 1 : 200

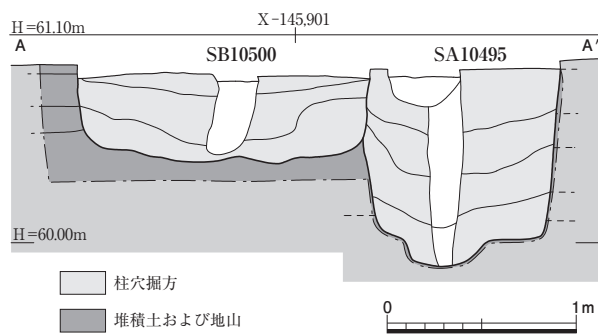


図285 SB10500・SA10945柱穴断面図 1 : 40

m、残存する深さは63cm、桁行柱間寸法は推定で約3.0m。三条条間路推定位置との関係をふまえると、この柱列がさらに南へと続く扉である蓋然性は高い。

土坑SK10499 調査区の南部で検出した東西45cm、南北62cm、残存する深さ36cmの土坑。平城Ⅳ～Ⅴの土器がまとめて出土した。

土坑SK10501 調査区の東北隅で検出した東西105cm、南北134cm以上、残存深さ15cm以上の土坑。軒丸瓦6282Gなどが出土した。（庄田慎矢）

4 出土遺物

瓦磚類 本調査で出土した瓦磚類は表34に示した。以下、状態のよい個体を報告する（図287）。

1は6135Aで外区外縁の鋸歯文は摩滅しているが、そのほかの文様は残りがよく、丸瓦部も一部残存している。SK10499出土。2は外区外縁を面取りし、花卉部分は摩滅しているが、6285Bであろう。北排水溝出土。3は6282Gで、SK10501出土。

磚はSA10495の柱抜取穴とSB10496の柱穴から各2点ずつ出土している。このうち、後者の出土品は完形品で長さ31.4cm、幅16.0cm、厚さ7.5cmである。

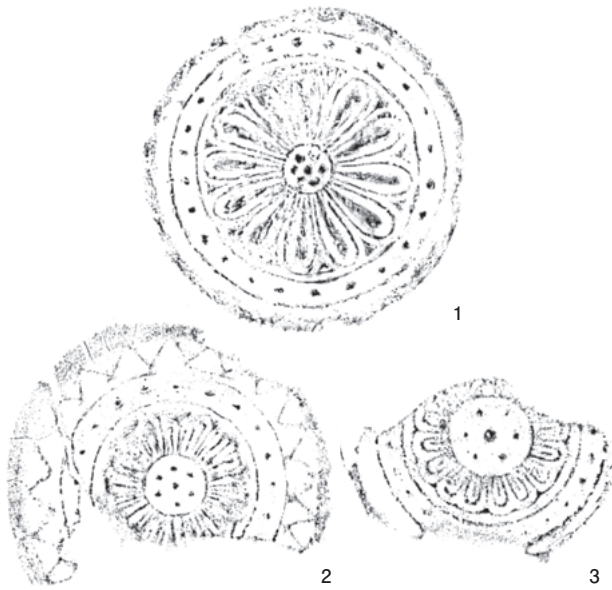


図287 第534次調査出土軒瓦 1 : 4

表37 第534次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6135	A	1	6688	Ab	1	道具瓦	2	
6282	G	1	型式不明 (奈良)		3			
6285	B	1						
軒丸瓦計		3	軒平瓦計		4	その他計		2
		丸瓦			平瓦	磚		
重量	36.329kg		115.089kg		11.151kg			
点数	405		2370		11			

瓦の100㎡あたりの出土量をみると、軒丸瓦が0.75点、軒平瓦が1点、丸瓦が9kg、平瓦が29kgとなる。この数値は総瓦葺きと考えられる平城宮中枢部と比較して極端に低いことから、本調査区の建物は総瓦葺きではなかった可能性が高い。(今井晃樹)

土器 整理用コンテナ3箱分の土器が出土した。奈良時代の須恵器・土師器が主体である。SB10500・SB10496・SA10495の各柱穴からは須恵器・土師器の細片が出土したのみで、時期比定は難しい。

SK10499から出土した土器を図示した(図288)。1～4は土師器。1は椀A。平坦な底部から内彎気味に口縁部が立ち上がる。外面下位にヘラ削り調整を施した後、ミガキ調整を施す。2は杯A。平坦な底部から外方に口縁部が立ち上がる。器面の磨滅が著しく、暗文・ヘラミガキ等は観察できない。3は高杯Aの脚柱部。円筒状に作った脚部を杯部に接合するa手法で成形し、断面九～十角形になるよう外面に縦方向の面取りを施す。4は甕A。口縁端部を小さく折り返す。外面に刷毛目調整を施す。5は須恵器甕B。口頸部が短く屈曲し、口縁端部を外方に折り返し、丸くおさめる。肩部が緩やかに降り、

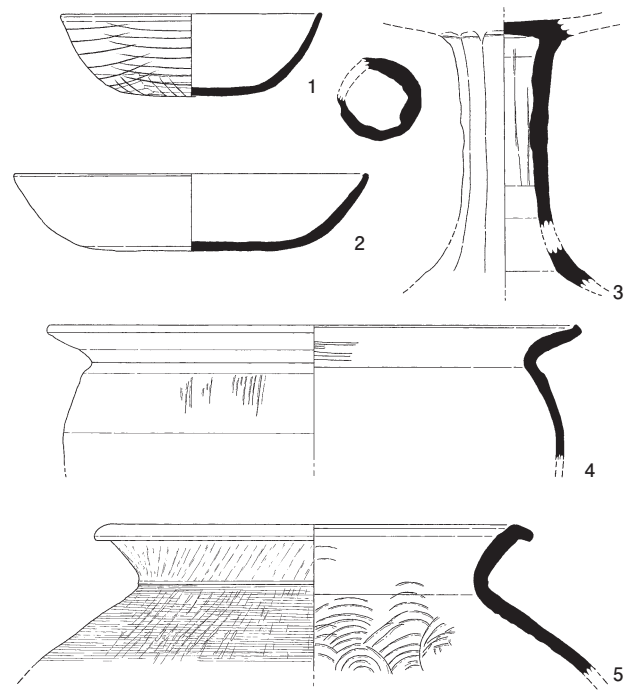


図288 第534次調査出土土器 1 : 4

外面は平行叩きの後、カキメを施す。これらの土器は平城宮土器IV～Vに位置付けられる。(小田裕樹)

5 おわりに

今回の発掘調査により、平城京左京三条一坊十五坪の南部にも大規模な建物が存在したことがあきらかになった。東西棟掘立柱建物SB10500は、南北に廂をもつだけでなく、柱穴掘方の規模が一辺約1.5mと大型である点が注目される。また、遺構の重複関係からSB10500が建てられる以前にはこの空間が東西堀SA10495によって南北に区切られていたこともあきらかになった。このうち南側の空間は南北堀SA10498によってさらに東西に分かれているが、これらの堀が同時に存在したか否かは不明である。

一部の遺構の時期は出土遺物から奈良時代の後半に位置付けられるが、大半は出土遺物が少なく正確な時期比定が難しい。ただし、左京三条十五坪・十六坪の整然と建物群を配置した土地利用のあり方から考えると、本調査区の建物群も奈良時代に属する可能性は高い。各遺構の時期比定や、SB10500以南の土地利用の様相の究明が今後の課題である。(庄田・番光)

註

- 1) 奈良市教育委員会『奈良市埋蔵文化財調査概要報告 昭和60年度』1987。